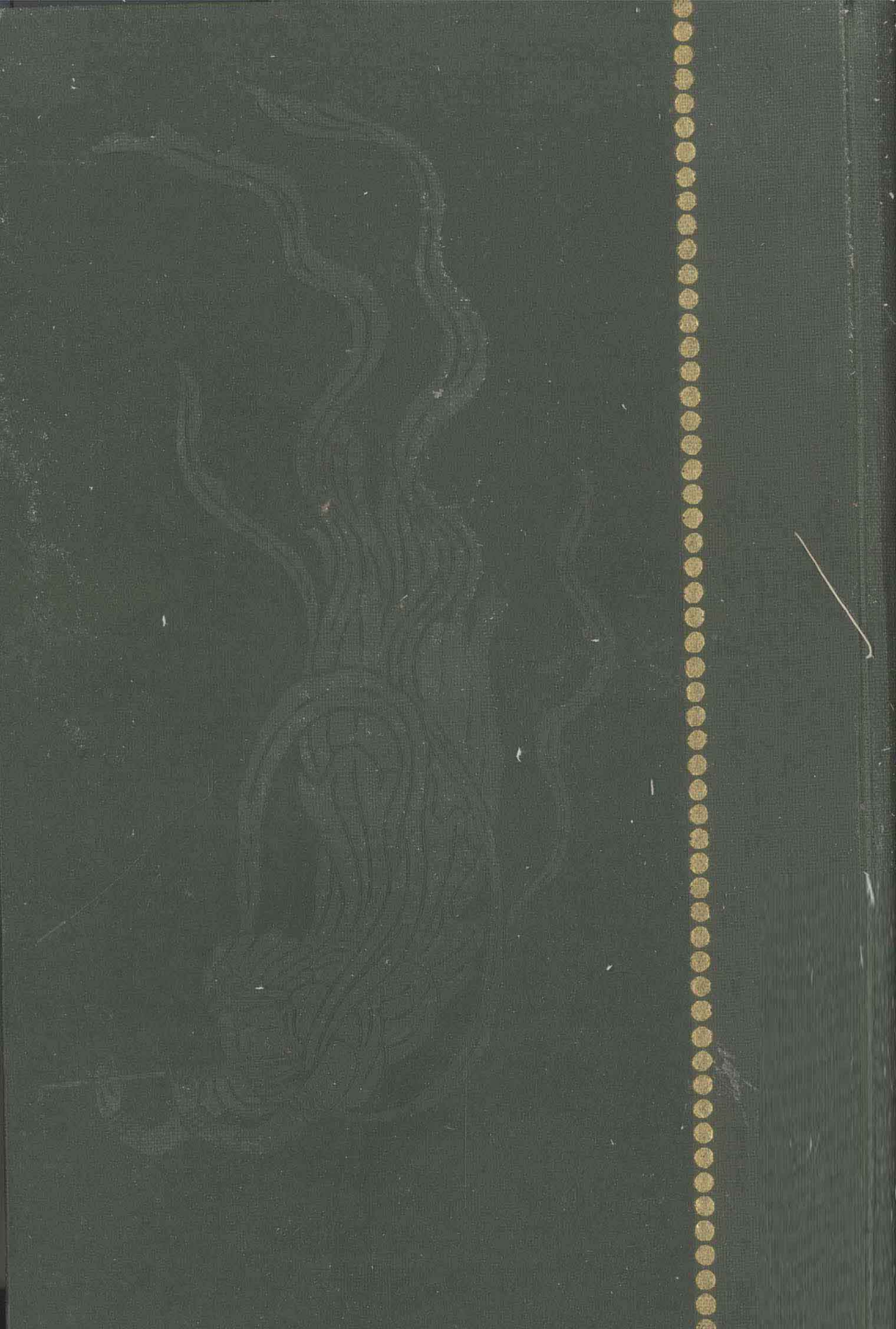




校註

日本文學大系

第八卷



昭和元年十二月二十五日印刷
昭和元年十二月二十八日發行

(非賣品)

日本文學大系

第八卷

編輯者兼
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八三番
振替東京五二二九八番

解題

文學博士 尾 上 八 郎

今昔物語集

今昔物語集、畧して今昔物語は、平安朝末期に現はれた驚異に値する大説話集である。從來、説話集はあるにはあつた。すなはち大日本現報善惡靈異記のごときはそれであるが、その話数はたゞ百十二のみである。今昔物語の載するところは闕文があり、闕卷がある故に、精密な數を擧げ得ないのではあるが、全體の話數は千二百附近であらうと云はれてゐる。しかすれば、本書の話數は、靈異記の十倍以上にも上つてゐるのである。この數は、日本のみならず、イソップ、アラビヤンナイト其の他の世界の大説話集にも優つてゐる事となるのである。かかる大著を成就した人の涉獵の廣いこと、傳聞の夥しいこと、讀書力の旺んなこと、交友の多いこと、更に氣力の強いこと、筆力のすぐれたこと、組織的の頭のあつたこと、周密な注意力のあつたことは、驚く

べきである。實に、時流に超越した人でなくては到底かかる大著は、企てられないのみならず、完成し得ないのである。

本書は、天竺、震旦、本朝の三大部から成つてゐる。天竺の部が前に、震旦の部が次に、本朝の部が更にその次にあるが、話数は、本朝に於て殊に多く、兩部を合したものの二倍をも超えてゐる。これによつて見ても、作者——精密に云へば編者であるが、普通云ふ所に従つて——が重きを本朝に措いた事は明らかである。徒に、佛法の發生した國であり、釋尊の出現したところであるが故に天竺を、我が國に佛法を傳へた地であり、優秀な文化をもつた國である故に震旦を尊重したのではないことが推測せられる。

作者のこの一大説話集を編述した目的は、何處にあつたのであらうか。たゞ興味のあるに任せて、意義もなく、主眼もなく、蒐集筆錄に勉めたものであらうか。或は、何等かの重要な主義主張を現ぜむがために、この大努力を拂つたものであらうか。それに就いては、まづこの書の組織から見ねばならぬ。

既に述べた如く、この書は三大部から成つてゐる。が、その一々を見ると、その最初の天竺の部には、天竺と標して三卷、天竺附佛後として一卷、天竺附佛前としてまた一卷がある。震旦の

部には、震旦附佛法として二卷、震旦附孝養として一卷、震旦附國史として一卷がある。本朝の部には、本朝附佛法として九卷、單に本朝として一卷、本朝附大織冠として一卷、本朝附世俗として二卷、本朝附宿報として一卷、本朝附靈鬼として一卷、本朝附世俗として二卷、本朝附惡行として一卷、本朝附雜事として二卷がある。これで見ると。佛教説話が、天竺、震旦、本朝を通じて、甚しく夥しく、これ以外のものは、震旦に孝養、國史、本朝に世俗、宿報、靈鬼、惡行、雜事があるのみである。しかも、これらの中に佛教的氣味の盛んなものが散在してゐるのであるから、嚴密に云へば、佛教の雰圍氣を脱してゐるものは、極めて少數である。乃ち、殆んどすべてを擧げて、佛教説話と稱しても差支ない位である。

佛教が上代の末に這入つて來てから、漸次弘布の勢を強めて、奈良朝を經、平安朝に入つてはいよく盛んとなつた。この間、時と共に舊傾向が廢れ、新傾向が起つて、新宗教が出來ると、それは、極めて日本的氣分を帶びたものであつた。本地垂迹説の如き、彼是を混和し融合して、信仰上の支障齟齬のないものもあらはれたので、流行の勢は、甚しいものとなつて來た。これとともに種々の著作があらはれるのは當然の事である。それには、單純に教理そのものに關した類もあるが、それはあまりに勃率であり、弘布の道ではないので、文學的要素の多くを取り入れて

興味を以て、廣く讀ませようとした。この目的によつて、種々の作物が數多く出來たが、遂に次の時代には、佛教的弘布が本義か、文學的讀物が主意か、判明せぬもので現はれるに至つた。従つてこの時代には、兩者の間に介在するものも亦數多くあるのは云ふまでもない。大説話集たる本書は、實に、その兩端の中途に在るものである。更に云はば、日本靈異記から、平家物語、源平盛衰記等に到る、かなり長い長い道程の間に、巍然として聳ゆるのみならず、居然として大地域を占領してゐる大山の如き異數の作品である。

本書は、普通三十一卷から成つてゐる。前に述べた闕卷は三卷で、第八卷、第十八卷及び第二十一卷である。この中で、佐藤誠實博士は、詳細に論じてこの卷數を正してゐられる。乃ち、宇治拾遺物語考に、「二十四、二十五、二十八は、本朝附世俗の部なるべし。二十五卷の内にて、二十一は缺け、二十二は、第一段に始まりて、第八段に終り、二十三は、第十三段に始まりて第二十六段に終れば、二十三は、二十二の末つかたにて、第九段より第十二段まで缺けたること、七の卷の、第三十三段より第四十段まで缺け、十の卷の、第十三、第十四の二段の缺けたるが如くなるべし。」として、二十二と二十三の兩卷は、合して一卷となるべきを云ひ又「二十三の目錄の首に、本朝附大織冠とあるも、二十二の首に、『大織冠始賜藤原姓語第一』とあるを指せるにて、

其の卷の續きぞと記せるが、文字の落ちたるなるべし。又此の二十二、二十三の首に本朝とのみあるも、前後の例に違ひて、事の足らぬ心ちのせらるゝは、舊は本朝附世俗とありしなるべく、二十三に、附大織冠とある附の字は即ち其の附の字なり。されば、此の二十二、二十三は、二十二の卷にして、本朝附世俗の部なるべし。」といつて、二十二、二十三の合卷は、本朝附世俗で、附大織冠の大織冠は、文中の語句が誤つて、目錄中に入つたので、實は世俗の二字であつたのであらうと云ひ、更に、「又二十八は、二十三の卷なるべし。本朝附世俗の部の、かく卷を隔つべき謂なければなり。因て、二十一より二十五までの五卷を、本朝附世俗の部と定めつ。」と云はれてある。しかすると、卷二十八が卷二十三と改まつたのであるから、そのあとの卷に變動が起らねばならぬ。博士は、乃ち、「二十九は二十八なるべく、三十一は二十九なるべくか。」といはれてゐるが、これは第三十卷は第二十九卷、第三十一卷は第三十卷であるといはるべきであらう。博士の論據は今昔物語は宇治拾遺物語と同物であり、本朝書籍目錄に二十卷とあるのが誤りで、實は三十卷であらう。廿、卅、冊の三字は、其の形が能く似てゐるから、昔から互に誤ることが常にあるから、現在の三十一卷は、三十卷たるべしといふにある。しかし、博士は、又後に、この書は五卷、十卷を一類としてゐるから、第三十卷から第三十一卷にかけて、本朝附雜事として、一

の部を立ててゐるのも疑はしい。そこで、「本朝書籍目録に、二十卷とあるは、三十幾卷か、四十卷かの誤にて、三十一より下も、尙ありしにてもあるべし。」とも云はれてゐる。さうすると、この全卷數は全然不明になるのであるが、博士の論は、大體三十卷といふのにあると思はれる。藤岡作太郎先生は、この第二十二、二十三兩卷を一卷とし、「従うて、今昔の卷數は三十卷ありしなるべし。」と云はれてゐる。まことに、第二十二、二十三兩卷は、合一すべきものであらう。しかし、震旦の部の國史の中に、帝王の事を最初に列記してゐるが如く、本朝においても、いづこにか然るべきものが一卷存在したのではあるまいか。坂井衡平氏の、第二十一卷がそれであらうかと云はれてゐるのは、注意すべきである。第二十八卷の、離れて世俗とあるのは不審である。これは、必ず前の世俗部の中に繰上ぐべきであらう。

本書の三大部の第一節である天竺の部は、釋迦の傳記から始まつてゐる。釋迦は、釋迦菩薩と云つて、兜率天の内院に住んでゐたが、閻浮提に生まれようと云つて、天竺摩竭提國の淨飯王の后摩耶夫人の胎に宿るといふのが、最初の物語である。その摩耶夫人が、嵐毘尼蘭の无憂樹下に到ると、太子が生まれて光を放つた。生長して、道に老者、病者、死者を見る、また僧を見る。深く感じて、十九にして出家をする。山に入つて、ひたすら道を修める事をする。魔王が驚いて

妨害をする。それを排除して、太子は二月七日の夜大悟した。而して、その道を布くべく努力する。それが著々成功して弟子も殖え信仰者も増す。その間に、種々の不思議を見せて、佛徳の廣大無邊なる事を人に示す。この聖者にも、遂に涅槃の日が到達する。菩薩、天人、天龍八部、若干の衆會、異類の輩、歎かぬものはない。大地、諸山、大海、江河、皆悉く震動した。遺言によつて、轉輪聖王の如く、荼毘をする。八國王が來て、各その骨の八分の一を得て歸國する。第一卷から第三卷までは、以上の出家談と涅槃談のみではない。佛道の尊むべく、重んずべく、無雙の靈驗のあること、神異のあることをも列記してあるが、大體釋迦の一代記といふべきである。時の永く遠く、信の廣く久しき、事はおのづから神聖化し、傳説化して深遠幽奥な大釋迦傳は、不知不識の間に成立したのである。

佛涅槃の後、弟子の阿難が、大小乗の經を結集するといふことから、第四卷が初まる。阿育王が、八萬四千の塔を立てる。狗拏羅太子が、法力に依つて失つた眼を得る。比丘僧譯が淨土に生まれる。天井の鼠が經を聞いて、忉利天に生まれ、人を嚙む醉馬が、おなじく經を聞いて、慈悲心を發する。すべて人間のみならず、佛徳は禽獸にまで及ぶのである。かく功德ある處から鸚鵡や大魚が媒介して、佛法を悟らぬ國人に、阿彌陀佛と唱へて、淨土に往生せしめる事をもする。

實は、佛陀が鳥又は魚に化生して、佛教の流布を行つたのである。これらの靈驗説話の中に、震旦國の話も混じてゐる。これは震旦の部からの偶然の竄入であらう。全體は、目次にあるが如く佛後たることはいふまでもない。

本生説話は、第五卷に満ちてゐる。勿論この外に、御伽的説話もある。乃ち囉鹿那國王が、鼠のために戰に勝つ事、龜が人の恩を報いる事、狐が獅子に乗つて身を亡ぼす事等種々あるが、佛教説話中で、殊に古く、かつ主要成分である本生説話が、その主なる部分を作つてゐる。波羅奈國王が、羅睺大臣に討たれる。その太子が、一切衆生濟度の念を起す。羅睺大臣は遂に亡びた。その太子が今の釋迦で、羅睺大臣が今の提婆達多である。大光明王は施與の心が深い。鄰國の王がこれを嫉んで、波羅門を雇うて、王の頭を乞はしめる。王は臣下の諫を容れずして、頭を與へた。この王が今の釋迦で、鄰國の王が今の提婆達多である。五百人の商人の連れた沙彌が、商人の水を得ずして苦しむのを見て、巖の尖で頭を打つ。その血が變じて水となつて、商人等の渴を醫した。この沙彌が後の釋迦で、五百の商人が後の五百の弟子である。これらは、皆人間の前生が、猶人間であつたのである。天竺の某の山に住む九色の鹿と鳥と交はりが深かつた、鹿が偶然に水に溺れる人を助ける。國王の后が九色の鹿を夢みて求める。助けられた人が、その所在を告

ける。國王が狩しに行つた。この鹿か今の釋迦、烏が阿難、后が孫陀利、水に溺れた男が提婆達多である。雌雄の猿が、二子があるので食を求めに出でかねる。獅子が憐んでその二子を預る。鷲が獅子の眠を窺つて、それを奪ふ。獅子は驚いて、鷲に頼んで、自分の肉を割いてそれと交換した。この雌猿が今の善護比丘、雄猿が今の迦葉、獅子が今の釋迦、鷲が今の提婆達多である。これらは人間の前生が、皆禽獸であつたので、前と異なつてゐる。かくの如きは、古く傳へられてゐた昔話が、釋迦の事蹟に結びつけられ、その説話中の、善行をしたものが、今の釋迦であるとして、教化の材料に供されたものであらう。しかし、これらも、前生後生の考へがなくては、出来ぬものである。乃ち輪廻轉生の思想の下でなくては、成立せぬ性質の説話である。善は善に報い、惡は惡に報い、善者は善者と生まれかはり、惡者は惡者と生まれかはる、轉々として車輪の廻るが如くなることを深く信じた上に出来、信じさせむがために強く説かれたのである。この信仰のために、その對象として、寺塔さへその處に建立せられるまでに及んでゐるのを見て、その説法の及ぶところの、深くかつ廣いことが知られる。佛者の傳記を述べて、その廣大無邊の功德を説いた上に、この輪廻轉生を説くのは、順序として適當なことである。作者は、佛教文學として、いい配置をしたものである。而して、これら皆、佛前に關したもののたる事は、目次に示

した如くである。如上の多くの説話は、何に縁つたのであるか。芳賀矢一先生の攷證によると、法苑珠林、經律異相、三寶感應要畧錄、大般涅槃經、維摩經、大唐西域記等の説くところと、殆んど一である。恐らくはこれらのあるものに縁つたのであらう。

第二部の震旦の部は、佛教の東漸を以て初まる。秦の始皇の時、利房といふ僧が、天竺から支那に來た。始皇は怪しんで禁獄すると、釋迦が虚空から飛び來つて、それを取つて去つた。これによつて、佛教は、この時に支那に渡らずして、後漢の時に到つた。後漢の明帝は、夢に金色の人を見る。それに應じて、天竺から摩騰迦竺法蘭が來る。これから廣布することとなる。梁武帝の時に、達磨が來る。唐の玄宗の時に、胎藏界、金剛界の曼陀羅が渡る。かくして、佛教は屢不可思議を現はす。仁王呪によつて敵が退散する。釋迦像を作るによつて、死より生にかへる。釋迦及び阿彌陀の二像を作るによつて、死後には極樂に生まれ、現世には富も得られ、平産も出来る。金剛界、胎藏界の曼陀羅を拜しても念じても、難は免れる。經を書寫することも夥しい功德である。たゞ、命を延べたり、死から生を得たりするのみならず、淨土に生まれる事も容易である。これを強く説いたのが第六卷である。

佛經の書寫、讀誦の功德の大きな事を更に示すべく、第七卷は出來てゐる。前卷にも延命經、

阿彌陀經、その他の功德を述べてあるが、その中に、華嚴經に關するものが比較的多かつた。この卷に到ると、大般若經の推重が目立つ。これを誦すると、人はたゞ延命のみでなく、天にも生まれられる。鳩でも、人に生まれることが出来るのである。しかし、これを過ぎて、一層尊いものは法華經である。これによれば、難を免れるのみでなく、靈も伏せられる、鬼も縛せられる、臨終の際には瑞相も現はせられる。また死んでも、唇と舌とは死なずに残ることさへ出来る。この經の功德は、優に他を壓してゐる。この影響は、適切にわが國の説話に影響して來る。

震旦に於ける孝子説話は、甚だ多い。郭巨は黄金の釜を得、孟宗は冬筍を得、揚威は虎の難を免れ、東陽は烏の助けによつて父の墓を築き得た。孝行の徳は大きい。儒教のこれを尊重するのは尤であるが、佛説と關すると、この説話も、少しく趣をかへなければならぬ。乃ち儒教の唱道によるこの類の説話は、たゞ現世にのみ留まつてゐる。が、佛教が一たび入つてから、未來の世界にまで廣けられた。孫寶は冥土に行つて、官に訴へて母の苦を抜いて來た。大業の人は、馬に轉生した母に滿腔の涙を灑いだ。この反對に、姑に蚯蚓を食はした河南の婦は、白狗と成つた。繼子を虐遇した伊尹の妻は、烏と轉生した子のために射殺せられた。因果の報の驚くべく、怖るべき事は、思はざるべからずである。現世と冥途とは、僅かに一步の差である。因果の教を信ぜ

ぬものは、忽ち惡處に赴く。帝王の尊といへども、鶏卵を食する事多ければ、乃ち奈落に墮ちて無限の苦しみを受ける。況んや通常人は、それに倍徙するものがある。冥途の幽暗は云ひ難いので、明處に赴かむことを欲すれば、更に錢を賄するを要する。この收賄贈賄の説話は、支那の官吏の常習から成立したものとおもはれる。これが第九卷にある。

佛教説話とは異なるが、支那の古傳説は、日本に渡つて來て、思想的に知識的に影響した。これを知悉するとせぬとは、關係する所が甚だ多い。故に細かにこれを説く。秦の始皇の事蹟は、支那史上の驚異である。支那は、この人によつてはじめて統一せられた。咸陽宮は營まれた。不死の藥は求められた。高大魚は射殺せられた。しかし、百年の天子はなくて、死んでの後に紛亂が起つた。龍王の子といふ漢の高祖が現はれて、新しい統一をする。武帝にいたつて、張騫が天河に行く。元帝の時、王昭君が胡國に行く。唐になつて、玄宗の時、上陽人が空しく老いる。楊貴妃が亂源をなしたので絞殺せられて、蓬萊宮裏の人となる。かくの如き類が、正史的説話として考へられたとみえて、眞先に説かれてゐる。孔子に關するもの、莊子に就いてのものには、道德學術に關し、養由、李廣のは武術に關し、霍大將軍、蘇規、相如、長安の某女のは夫婦に關し、賈誼のは父子に關し、田氏の三子のは兄弟に關して重要視せられ、また珍奇とせられた説話

であつた。これらを記載したのが、第十卷である。

以上の説話は、主として、何によつたのであらうか。芳賀先生の攷證によると、例の法苑珠林及び神僧傳、三寶感應要畧、搜神記、列女傳、前漢書、後漢書、莊子、淮南子、春秋左氏傳、史記等の諸書の所説と同様のものがある。恐らくは、これらの中の、あるものが根據となつたのであらう。

本書の三大部の第三部は、本朝の事である。作者の主としたのは、天竺もあり震旦もあるが、特に一層の重きを措いたのは、本朝に關したそれであるのは既に述べたが、作者は、殆んど本朝を説かむがために、天竺、震旦二部は措いたかの觀がある。乃ち天竺においてもかくの如し、支那においてもかくの如し。本朝においても、またかくの如きは當然である。天理の一貫して動かすべからざること、恰も天日の昭々として、千古を貫いて照らしてやまざるが如きものである。この一貫した眞理を教へるものは佛教である。これに縁らなくては、たゞ冥より冥に入り、暗より暗に赴くのみである。輪廻轉生、因果應報の大道は、人間として、必ず知らなくてはならぬものである。これを眼前の事實として提示するものは、三國を通じた夥しい説話である。これによつて、人は必ず覺醒せねばならぬ、争つて佛道に入らねばならぬと云ふのが、作者の主眼であり

目的である。故に、世俗を説く場合に於いても、興味をのみ中心とせずして、猶前世の宿業を述べる事が多い。すべてに於いて、佛教の發揚であり、宣傳である。

本朝に於いて、佛教の最初の宣傳者は聖德太子である。故に第十一卷の説話はこの太子から起る。廐戸の邊で生まれさせられた太子は、蘇我の馬子と相結んで、佛教の弘布に努力せられる。守屋が歿してから有力な反對者もなくなつたので、太子の努力の功績は著々と顯はれて来る。名僧知識も次いで出る。本書説述の順序のまゝにいへば、行基、道照、道慈、玄昉、鑒眞、弘法、傳教、慈覺、智證の物語は、おのづから生じる。而して三論、法相、律、眞言、天台等の諸宗が傳はつて来る。従つて、法隆寺、天王寺、東大寺、山階寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法華寺、久米寺、金剛峯寺、延暦寺、園城寺、清水寺等、挙げ來れば頗る多いが、皆出来る。これらの次第を明らかにし、由來を語る事は、乃ち佛教の尊重すべき所以、大にしては國家、小にしては一人に缺くべからざる所以を語るのである。而して、その事件に附帶した神怪奇異な諸談は、その佛教の幽玄にして、佛徳の靈妙不思議なるを明らかにする所以である。しかし、これらの多くが、天竺の諸説話の翻譯により、或は添加になつたのは、云ふまでもあるまい。

佛教の諸儀式は大事である。この所以を記すのは、その信仰心を煽揚すべく、また大切なこと